

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：47701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520688

研究課題名(和文)中国語教育への社会的要請に応えるコミュニケーション能力育成のための日中対照研究

研究課題名(英文)A Contrastive Study of Japanese and Chinese Communication Styles: Towards Effective Chinese Education

研究代表者

楊虹(YANG, HONG)

鹿児島県立短期大学・文学科・准教授

研究者番号：20571607

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語母語場面と中国語母語場面、日中接触場面という3場面(各場面はさらに2者間会話と4者間グループ討論の2種類含む)計6種類のデータを収集し、その分析と考察を行った。

分析の結果、中国語母語話者と日本語母語話者のコミュニケーション・スタイルの特徴に違いがみられた。共感構築的側面が強い日本語母語場面と比べ、中国語母語場面では情報交換的側面が強く、共感構築的側面の少ない展開となっている。また、日本語母語話者と比べ、中国語母語話者はモダリティ表現を付加せずに、断定的に不同意を伝えることに抵抗が少ないことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present study is to identify specific differences in the communication styles of Chinese and Japanese speakers. The data reflects six different types of conversations, including dyadic conversations and four-person group discussions.

The results highlight different characteristics in the communication styles of Chinese and Japanese speakers. Specifically, whereas Chinese speakers attach importance to the goal of exchanging information, Japanese speakers treat the promotion of empathy as an unstated goal of conversation. In addition, while Chinese speakers voice disagreements more frequently and use more direct expressions, it is the norm for Japanese to soften points of disagreement or conflict with expressions of modality.

研究分野：談話分析

キーワード：言語教育 コミュニケーション教育 コミュニケーション・スタイル グループ討論 初対面会話 モダリティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本国内においては、日中両国の架け橋となる高い語学力及びコミュニケーション力を持つ人材の育成がますます重要な課題となっている。日中間のコミュニケーションに関する基礎研究がまだ十分とは言えず、様々な観点から日、中それぞれのコミュニケーションの特徴や、日中接触場面のコミュニケーションの特徴を明らかにすることが求められている。

(2) 異文化間コミュニケーションの参加者は自分の母語及び母文化のフレームを用いて、接触場面に参加するためしばしばコンフリクトが起こるということはこれまでの研究により指摘されている。また、談話分析の手法による母語話者同士や異言語話者同士による接触場面の研究が行われ、それぞれの母語話者のコミュニケーションの特徴や、異文化間コミュニケーションの特徴がある程度明らかになっている。しかし、これらの研究は欧米諸国や日米間で行われることが多く、日中間ではまだみられない。

(3) 国際交流やビジネスの舞台では、自分の意見を述べ、相手の意見を受け止め、必要に応じて反論する力は不可欠である。また、意思決定の場面における合意形成のプロセスはコミュニケーションへの満足度を反映するとともに、問題点をも浮き彫りにする。その実態を明らかにするためには、様々な観点からボトムアップに分析し、考察することが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、意思決定の場面における意見表明及び合意形成のプロセスにおいて、中国語母語場面と日本語母語場面にそれぞれどのような特徴がみられるか、どのような相違があるかについて明らかにする。これらの結果を踏まえ、日本人中国語学習者に日中交流やビジネスの場面で必要なコミュニケーション能力を提示し、中国語教育や日中異文化間のコミュニケーションに寄与することを目指す。

3. 研究の方法

意思決定場面における意見表明および合意形成の日、中の母語場面のコミュニケーション・スタイルを比較し、その異同を明らかにした上で、実際の接触場面を分析し、中国語学習者のコミュニケーション能力の実態を解明する。実際の相互行為を録音・録画で記録し、文字化資料を作成して分析するという談話分析の研究手法を用いる。中国語学習者に必要なコミュニケーション能力をより多角的に提示するため、2者間会話と4者間グループ討論という2種類のデータを収集、不同意発話にみられるモダリティ等の言語形式から意見表明発話全般に生起する思考動詞の使用状況、発話交換の連鎖の特徴などを分析し、考察した。

4. 研究成果

(1) 2者間会話における日中間のコミュニケーション・スタイルの解明

初対面会話の発話連鎖に生起する「同意要求-応答」の連鎖を分析し、日中母語話者間の会話のスタイルの特徴の一側面を明らかにした。

初対面の会話では、会話の参加者たちは、お互いをよりよく知りあうために共通点を探し情報交換を積極的に行う。そのため情報要求の質問が多くみられる。一方で、情報交換がある程度進んだ場面で、参加者間でより親密度の高い会話を行うには、聞き手を自らの認識域に引き入れながら意見や感想を述べる同意要求の発話が用いられ、参加者間の共通認識や共通の感覚を確認しあい構築していくプロセスもみられる。前者を会話の情報交換的側面とすれば、後者は会話の共感構築的側面である。

本研究では、日本語母語場面と、中国語母語場面、日中接触場面にみられる同意要求とそれに対する応答発話を含む「同意要求-応答」の連鎖を分析し、それぞれの初対面会話における共感構築の一端を明らかにした。

分析の結果、同意要求に対する応答には、相手のほめに対する否定を除けば、ほとんどの応答は同意要求発話を受け入れ、同意を示すものである。これらの同意を示す応答は、先取り・共話、情報・評価の提供、類似した同意要求、語彙・表現等の繰り返し、情報要求、応答詞・相づちのみ、という6つのパターンがみられた。

日本語母語場面と中国語母語場面を比較した結果、日本語母語場面では会話の内容に応じて様々な応答のパターンが見られたのに対し、中国語母語場面では、同意要求発話そのものが少なく、また応答のバリエーションも少なく、情報・意見の提供と応答詞・相づちのみに集中していることがわかり、情報交換的側面が強い中国語母語場面は、話を進めることを優先する会話展開であることが明らかになった。一方で、中国人日本語学習者が参加する接触場面においては、学習者の応答には、積極的に共感を示す応答が少なく、応答のパターンは応答詞・相づちのみに集中し、共感構築的側面の少ない会話展開となっていることが明らかになった。また、学習者の応答には日本語能力の制約が影響しているほかに、中国語母語の影響を受けていることが示唆された。

初対面の会話において、参加者たちはお互いに関する情報や共通の経験が少なく、相手と自分と同様な認識を持っているかどうか予測しにくいと、同意要求の発話は相手から肯定的な応答が得られないリスクも伴う。しかし、日本語母語場面の初対面会話では、会話の参加者は、相手との共通認識の喚起や確認を通して、相手から共感を引出し、または共感を積極的に示すことにより、距離を縮め、会話の共感構築的側面を促進しながら会

話に参加しているという特徴がみられた。日中異文化間コミュニケーションに参加する日本語母語話者と中国語母語話者が、互いの会話のスタイル、すなわち情報交換の側面を重視する中国語母語場面の会話のスタイルと、共感構築的側面も重視される日本語母語場面の会話のスタイルとの違いを理解することが大切であり、中国語教育や日本語教育の現場で、こういった違いを提示し、効果的な指導方法を提案していく必要があると思われる。

(2) 討論における意見表明の分析

中国語の意見表明発話における思考動詞「覺得」「感覺」(と思う)の機能の分析

私たちが、ある情報または物事に対する自らの意見、評価等を相手に伝える際に、使用する言語表現によって、その伝える内容に対する自らの立場やとらえ方、さらに聞き手に対する態度も異なって伝わる。情報や意見等は発話の内容的な部分で命題であり、内容に対するとらえ方態度の伝達はモダリティである。相互行為における発話はこの命題とモダリティの二つから成り立つ。

本研究は、中国語母語場面の4者間の討論の場において、意見を表明する発話に多く生起するモダリティ表現「覺得/感覺」がどのように用いられるかを考察し、その機能を明らかにする。

データは、中国の某大学で収集した4人1組のグループ討論22組の録音・録画資料(計7時間20分)である。分析は、文字化資料から、「覺得」と「感覺」を含む発話の量的分析及びその前後の会話を含む文脈からの質的分析の両方を行った。

「覺得」「感覺」の生起頻度、目的語節の位置、主語の人称、話し合いのプロセスにおける生起の傾向という4つの観点から分析した結果、1. 認識や評価を示す際には「覺得」が最も多く用いられる、2. 目的語節に後続する現象は「覺得」「感覺」の両方ともにみられ、認識や評価の内容に対する確信度は「覺得」より「感覺」のほうが低い、3. 「感覺」は個別の事象に対する評価発話に多く用いられるが、「覺得」は話し合いにおいて論点を提示する発話や話し合いをまとめる発話など討論の展開を方向付ける発話においても用いられる、という3点が明らかになった。本研究によって、中国語学習者にとって、従来ひとまとまりに「語気が軽い」で説明されてきた認識や判断を示す動詞「覺得」「感覺」の使い分けにより具体的な指標を提示できた。

不同意表明発話のモダリティ使用に関する分析

本研究は、討論に生起する不同意発話の言語形式に焦点を当て、発話文のモダリティの分析をした。分析には、日本語母語場面、中国語母語場面及び日本語使用の日中接触場

面という3種類の課題達成型の話し合いのデータを用いた。同質のデータとなるよう、討論の参加人数、性別等を揃え、選択肢の中から一つの地域を選ぶというほぼ同一の課題を与えた。日本語母語場面では3組(計60分)で、中国語母語場面では5組(計100分)で、日中接触場面では6組(計120分)である。

分析の結果、接触場面の不同意発話数は67であった。日本語母語場面の不同意発話数は39で、中国語母語場面の不同意発話数は119であった。1回20分の討論における平均の生起頻度は、接触場面11、日本語母語場面13、中国語母語場面24であった。日本語母語場面、日中接触場面と比べ、中国語母語場面の不同意発話の生起頻度が顕著に高いことがわかった。

モダリティ表現の使用状況をみると、日本語母語場面と接触場面の日本人参加者の場合、不同意発話に有標モダリティを付加する割合が8割を超えるのに対して、中国語母語場面と中国人学習者の場合、有標モダリティの付加は5割強にとどまる(表2)。すなわち、中国語母語場面と接触場面の中国人学習者の不同意発話の約半分が有標モダリティを付加せず断定的に発話されている。一方、日本語母語場面と接触場面の日本人は基本的にはモダリティ表現を付加して不同意の意見表明をする。

表2 モダリティの使用状況

	モダリティ 付加あり	モダリティ 付加なし
日本語母語	87%	13%
中国語母語	57%	43%
接触—中	51%	49%
接触—日	83%	17%

実際の会話をみると、日本語母語場面では、反対意見を述べる際に、モダリティ表現を伴わないのは、自分のことについて言及している場合のみである。話し手の個人的な事情や心情を語る発話であるため、断定的に述べられていても相手にはそれほど強い主張と感ぜられない。一方、中国語母語場面では、断定的な不同意の発話を受けた参加者がさらに自分の主張を続け、不同意発話のやり取りが続く。中国語母語場面では、話し合いの参加者が互いの意見に命題のみの発話で不同意を示し合う場面がみられ、断定的に不同意の意見を伝えることに対して、中国語母語話者はあまりためらいを持たないことが示唆された。そして、中国人学習者の不同意の表明のし方に上記のような母語のコミュニケーションスタイルの影響が考えられる。中国語母語話者のこの不同意表明の仕方は、日本

語母語話者には、断定的で主張が強いと受け取られる可能性が高く、そのため話し合いが円滑に行われられなくなってしまう恐れも考えられる。

また、それぞれの場面で生起するモダリティ表現を分類しその傾向を分析した結果、日本語母語場面では、「認識」、「伝達」、「その他中途終了」、「表現類型」の順に使用が多く、「評価」は生起していない。中国語母語場面では、「認識」、「表現類型」、「伝達」、「評価」、「その他中途終了」の順に使用が多い。ここから、日本語母語場面と中国語母語場面の共通点として、「認識」のモダリティの生起頻度がいずれも5割を超え、最も高いことが指摘できる。また「伝達」の生起頻度もほぼ同じである。次に相違点についてみると、中国語母語場面では、「表現類型」の生起頻度が比較的高いことがわかる。これは、中国語母語場面では、疑問を呈する形で不同意を示すことが比較的多いことによる。また、「その他中途終了」については、中国語母語場面では少ないことも大きな違いの一つである。

以上の結果を踏まえ、本研究はさらに、認識のモダリティの使用形式の下位分類をしてより詳しく分析した。その結果、中国語母語場面では「と思う」系の思考動詞が多くみられ、一方の日本語母語場面では推定(らしい、ようだ、みたい)や伝聞(っていう)を表す表現が多くみられ、使用する言語形式に違いがみられる。SVO語順を取る中国語では、モダリティ表現は述語が発されるまでに現れるもので、発話内容を計画する段階で認識のモダリティの使用有無を決定するものである。一方で、SOV語順を取る日本語では、述語は最後に現れ、助動詞は述語動詞の後に続くため、モダリティは文末に付加される。すなわち話し手は発話していく中で、発話内容や相手の反応などを見ながら、モダリティ表現を付加していくことが可能である。つまり、中国語と日本語の認識のモダリティの生起位置の違いが、学習者のモダリティの適切な使用に困難をもたらしたと推察される。

一方、接触場面の中国人学習者の特徴として、中途終了の発話の生起が多かったことが挙げられる。中国語では、中途終了発話の生起が少なく、基本的には完結した発話がなされる。しかし、学習者には、日本語力の不足が原因で文が完成しないまま発話が中断するものもみられ、結果的に不同意の意見を和らげて伝えることにつながったと思われる。

以上のように、中国語と日本語の語順が異なるため、中国人日本語学習者にとって、発話を構成する際、文末に認識のモダリティを付加していくことは難しいということが示唆された。逆に日本人中国語学習者の場合を考えると、モダリティ表現を文末に付加するという日本語の語順の影響を受け、モダリティ表現を付加せず述語まで発話してしまい、最終的に付加することができなくなるということも予測されよう。こういった日中両言

語の語順の違いは、中国語、日本語両言語の学習者のモダリティ表現の使用に影響を与えたことが本研究によって明らかになった。

(3) まとめ

本科研は、日本語母語話者と中国語母語話者のコミュニケーション・スタイルの特徴の一端及び接触場面のコミュニケーションにおける母語の影響についての解明に努め、一定の成果が得られた。共通基盤が少ない初対面会話で、共感構築的側面の強い日本語母語場面の会話と比べて、中国語母語場面では情報交換的側面が強く、共感構築的側面の少ない会話展開となっていることが明らかになった。また、会話の相手に不同意を伝える際に、中国語母語話者はモダリティ表現を付加せず、断定的に伝える場面が全体の半分近くあり、断定的に不同意を伝えることに抵抗が少ないことが示唆された。一方の日本語母語話者は、基本的には、断定的な表現を避け、なんらかのモダリティ表現を付加して不同意を伝える。ただし、中国語母語話者は思考動詞を多く使用するという結果もみられた。もっとも多く使用する思考動詞「覺得」「感覺」の機能を分析した結果、両者の使い分けがみられた。この分析結果によって、中国語学習者に認識や判断を示す思考動詞「覺得」「感覺」の使い分けのより具体的な指標を提示できた。

また、日中接触場面の中国語学習者のデータの分析結果及び研究成果は最終年度内に公表できなかったが、日本語学習者の接触場面の使用状況を分析した結果、接触場面では母語の影響を受けることが明らかになったと同時に、目標言語の言語能力の制約による影響など接触場面の特性も明らかになった。今後は、引き続き日本人中国語学習者の接触場面の分析及び研究成果の公表に努めたいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

楊虹「初対面会話における「同意要求—応答の連鎖の分析—共感構築の観点から」『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』査読無、63, 2012, pp.119-133.

楊虹「意見表明発話における「覺得/感覺」の機能の分析」『人文』査読無、37, 2013, pp.21-35

楊虹「話し合いにおける不同意発話のモダリティ—日中接触場面と中国語・日本語母語場面の比較から—」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』査読無、46, 2014, pp.81-102

楊虹、中川正之「中国語と日本語の感嘆表現—感嘆詞「あ(a)」「え(ei)」「哦」を中心に」『日中言語研究と日本語教育』査読無、7, 2014, pp. 50-59

〔学会発表〕(計5件)

楊虹「試論漢語自然口語中「覺得／感覺」の語用功能」

楊虹「初対面会話における共感構築の連鎖—学習者の同意要求とその応答発話に着目して—」

楊虹日中両言語を使用した E-mail の交流プロジェクト

楊虹「言語類型論から見た談話と言語教育—モダリティの表現を中心に—」

楊虹「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ—言語類型論的アプローチの可能性

〔図書〕(計1件)

楊虹・劉娜・金錦珠『日中韓比較文化研究第一回日中韓比較文化研究学術検討会大会論文集』(日中両言語を使用した E-mail の交流プロジェクト—自律的な外国語学習への支援の試み—) 遼寧人民出版社, pp. 91-96

6. 研究組織

(1)研究代表者

楊 虹 (YANG, Hong)

鹿児島県立短期大学・文学科・准教授

研究者番号: 20571607